

2013 年度点検・評価シート

I 評価項目・担当部局

対象部局	環境創造学部環境創造学科 Faculty of Social- Human Environmentology
評価基準 2	教育研究組織
点検・評価項目(1)	2-1 大学の学部・学科・研究科・専攻および附置研究所・センター等の教育研究組織は、理念・目的に照らして適切なものであるか。
評価の視点	教育研究組織の編制原理
	理念・目的との適合性
	学術の進展や社会の要請との適合性
点検・評価項目(2)	2-2 教育研究組織の適切性について、定期的に検証を行っているか。
評価の視点	責任主体・組織、権限、手続きを明確にしているか。また、その検証プロセスを適切に機能させているか。

II 【点検・評価項目ごとの現状説明】

2-1	2001年に開設された環境創造学部は、環境創造学科の一学科から構成され、学部の理念・目的、教育目標に照らし合わせ、適切な組織となっている。身近な暮らしから地球温暖化までを視野に『環境』を重視した新しい社会を考える。現場主義・コミュニケーション主義・実践主義がカリキュラム（インターンシップ・ボランティア等）の中でも貫かれており、学部のあり方は理念・目的に沿った形となっている。また「環境創造フォーラム」がこれら3つの主義の実行主体となっている。 ・「教育研究ワークショップ」において、学部の理念・目的とカリキュラムおよび教育内容との整合性を常時点検する。 ・全学的な理念・目的と本学部の理念・目的との連繋が図れるようカリキュラムや教育内容を微調整する。
2-2	月1度の教育研究ワークショップで検証を行っている。

【効果が上がっている事項】

2-1	・本学部の場合、教員各自の学問的専門性が異なっているが、教育研究ワークショップによって、相互に専門性を共有し、忌憚のない議論する場として定着している。
2-2	・環境創造学会の目的は「主体としての人間の生存環境の構築と持続可能な循環型社会の構築、この2つの目標に関わる人間の営為を自覚的に認識し、その成果を学生と社会に還元すること」である。教育研究組織の適切性について、「振り返り」の時間や「発表会」の機会をもって検証を行っている。「教育研究ワークショップ」（原則月1回）や「環境創造フォーラム」（年1回）等の機関において、定期的に「環境」というターミノロジーの<広義性>と<狭義性>を意識したテーマで議論し、理念・目的に関する教員間の共有認識を深めようと努力している。また、入門ゼミ発表会、卒業研究発表会、インターンシップ発表会など、学生による研究発表においても理念・目的を明らかにしている。

【改善すべき事項】

2-1	教育研究組織の在り方を学部で議論し、改善の必要性を指摘し合う時間を多くもつ。
2-2	学術の進展やグローバル化社会の要請との適合性について検証する必要がある。

III 本項目の根拠資料（データ類、裏付けとなる資料）

『2010 年度認証評価報告書』、『環境創造学部履修の手引き』2013 年度以降の環境創造学部の新カリキュラム表、『環境創造フォーラム年報』、教授会議事録

2014 年度からの達成目標

【達成目標】 目標の進捗状況は、「S：完全に達成」「A：概ね達成」「B：やや不十分」「C：不十分」で、評価する。

達成目標	目標達成の指標となるもの	評価					
		2014	2015	2016	2017	2018	
中期目標 (2014～ 2018)	・「環境創造フォーラム」の継続的実施により研究をより深化させ、地域貢献事業や社会に対する発信力を高めていく。 さらに『環境創造フォーラム年報』の発行によって学部の問題意識を明確にし、地域社会に発信する。	「環境創造フォーラム」の開催(毎年度1回以上)の継続。	→				
		『環境創造フォーラム年報』の継続的発行(毎年度1回)	→				
14 年度 目標	「環境創造フォーラム」の開催		→				
	『環境創造フォーラム年報』を発行するだけでなく、その内容を担当授		→				

学部

	業に反映し、ディスカッションなどアクティブ・ラーニングに応用する。						
	「教育研究ワークショップ」の開催によって各教員の専門性・学際性を「環境創造」の理念に照らし合わせて教育研究組織の適切性を認識する。		→				